

A-3

チュヴァシ語の位格・奪格における /r/ と /t/ の交替について

菱山 湧人

(東京外国語大学大学院)

チュヴァシ語の位格 {-RA} と奪格 {-RAn} について Krueger (1961) などは、/r, l, n/ で終わる語の後には /t/ で始まる異形態 -tA, -tAn が、それ以外の音で終わる語には /r/ で始まる異形態 -rA, -rAn が現れるとしている。しかし、Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012) が記述するように、/l, n/ で終わる一部の語には /r/ で始まる異形態も現れうる。/r/ で始まる異形態は、/l/ の後よりも /n/ の後でよくみられるように感じられるが、頻度に関する記述は見当たらない。本発表では定量的調査の結果から、/t/ 始まりの異形態の全体的な出現頻度が語末音によって高い順に左から「/r/ > /l/ > /n/ > 他」であることを示し、この傾向が、語末音の /r/ との類似性の高さと同様であることを主張する。チュヴァシ語の位格・奪格における頭子音交替は、他の多くのチュルク諸語の位格・奪格における頭子音交替に比べて、/r/ が現れる点、揺れが見られる点で特異である。共時的には異化で説明できるが、通時的にはロータシズムが起こった可能性がある。

0. はじめに

チュヴァシ語 (チュルク諸語オグル語群)¹ の位格接辞 {-RA} と奪格接辞 {-RAn}² について、Krueger (1961) などは、/r, l, n/ で終わる語の後には /t/ で始まる異形態 -tA, -tAn が現れ (例: *tävar-ta* 「塩で」、*Atäl-ta* 「ヴォルガ川で」、*värman-tan* 「森から」)、それ以外の音で終わる語には /r/ で始まる異形態 -rA, -rAn が現れる (例: *külë-ren* 「湖から」、*šiv-ra* 「水で」) としている。しかし、Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012) が記述するように、/l, n/ で終わる一部の語には /r/ で始まる異形態も現れうる (例: *kukäl'-ten/ kukäl'-ren* 「ピロシキから」、*rajon-ra/ rajon-ta* 「郡で」)。/r/ で始まる異形態は、/l/ の後よりも /n/ の後でよくみられるように感じられるが、頻度に関する記述は見当たらない。本発表ではコーパスを用いた定量的調査の結果から、/t/ 始まりの異形態の全体的な出現頻度は、語末音によって高い順に左から「/r/ > /l/ > /n/ > 他」であることを示し、この傾向が、語末音の /r/ との類似性の高さと同様であることを主張する。

共時的には、分布の広さから位格・奪格の基本形は /r/ 始まりであり、/t/ 始まりの異形態は、歯茎共鳴音 /r, l, n/ の後で (/l, n/、特に /n/ の後では部分的に) /r/ が /t/ に異化を起こしたものとみることができる。一方、他の多くのチュルク諸語で位格・奪格の形式は /d, t/ 始まりであることに加え、揺れは見られない。チュヴァシ語の位格・奪格における頭子音交替は、/r/ が現れる点、揺れが見られる点で特異である。通時的には、チュヴァシ語の位格・奪格の頭子音で /d/ > /r/ の変化 (ロータシズム) が起こった可能性がある。その場合、歯茎共鳴音 /r, l, n/ の後で (/l, n/、特に /n/ の後では部分的に) 接辞頭の /t/ が生き残ったと考えることができる。

本発表の構成は次の通りである。まず、第1節で先行研究の記述をまとめ、問題提起を行う。次に第2節で調査方法と調査結果について述べ、最後に第3節で今後の課題を挙げる。

¹ 8個の母音音素 /a, e, ä, ë, i, u, ü/ と、14個の子音音素 /p, m, v, t, s, n, l, r, š, č, ś, y, k, x/ を持つ (Clark 1998: 435)。

² 子音交替と母音調和による異形態 (位格: -ra, -re, -ta, -te, -če、奪格 -ran, -ren, -tan, -ten, -čen) を持つ。本文中では適宜、交替する部分を大文字で表した代表形を用いる。

なお、外国語文献の日本語訳、ラテン文字転写³、文字飾り、図表番号は特にことわりのない限り発表者によるものである。

1. 先行研究

本節では、1.1 節で欧米の先行研究である Krueger (1961) と Clark (1998) の、1.2 節でチュヴァシ語の伝統文法である Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012) と Pavlov (2014a, b) の記述をまとめ、1.3 節で問題提起を行う。

1.1. Krueger (1961), Clark (1998)

Krueger (1961: 105, 106) は位格 {-RA} の異形態について、母音と /l, n, r/ 以外の子音の後には -rA が (例: *külë-re* 「湖で」、*šiv-ra* 「水で」)、/l, n, r/ の後には -tA が (例: *Atäl-ta* 「ヴォルガ川で」、*värman-ta* 「森で」)、所有と複数の接辞の後には -če が (例: *aläk-sen-če* 「ドア (複数) で」 < **aläk-sen-te*)、三人称所有接辞の後には -nče が現れるとしている。Krueger (1961: 106) は、代名詞にもやや似た語尾が用いられるが、*man-ra* 「私のところで」は n+r となることに注意されたいと述べている。Krueger (1961: 107) は奪格について、末尾に -n が付いていることを除いて、位格の場合と全く同じであるとしている。

Clark (1998: 439) は位格／奪格について、母音と n, l, r 以外の子音に後続する場合は -rA/-rAn が、n, l, r に後続する場合は -tA/-tAn が現れ、三人称所有接辞＋位格／奪格は -inče/-inčen に、複数接辞＋位格／奪格は -senče/-senčen になるとしている。

1.2. Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012), Pavlov (2014a, b)

Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 288) は、位格のどの異形態が現れるかは語末音によるとし、次の4つのパターンを挙げている。1) r 終わりの名詞には -tA が付く (例: *tävar-ta* 「塩で」)、2) l, n, l', n' 終わりの名詞には -tA または -rA が付く (例: *kukäl'-te / kukäl'-re* 「ピロシキで」)、3) 他の音で終わる名詞には -rA が付く (例: *külë-re* 「湖で」)、4) 複数名詞には -če が付く (例: *ača-sen-če* 「子供たちのところで」)。Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 288) は、所有形の名詞に付く位格は、人称によって異なる異形態が、つまり一人称には -rA が (例: *tus-äm-ra* 「私の友達のところで」)、二人称には -tA が (例: *tus-u-n-ta* 「君の友達のところで」)、三人称には -če が (例: *tus-ě-n-če* 「そいつの友達のところで」) 付く (二人称と三人称の所有接辞と格接辞の間には子音 n が介入する) と述べている。Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 288) は奪格について、どの異形態が付くかは位格と同様であるとしている (例: *käkär-tan* 「胸から」、*kukäl'-ten / kukäl'-ren* 「ピロシキから」、*laša-ran* 「馬から」)。

Pavlov (2014a: 21, 22) は位格と奪格の異形態について、/l, n/ で終わる語のうち、固有語には原則として /t/ 始まりの (例: *yal-ta* 「村で」、*Xusan-ta* 「カザンで」)、借用語には多くの場合 /r/ 始まりの異形態が後続するとしている。Pavlov (2014b: 70, 71) は、-r, -r', -l, -l', -n, -n' を末尾に持つ固有名詞は -ta と -tan を、その他の音を末尾に持つ場合は -ra と -ran の形式をとり (例: *tävar-ta* 「塩で」、*mäkän'-ten* 「けし (植物名) から」、*xula-ra* 「街で」、*pürt-ren* 「家から」)、l, n で終わる借用語の場合は両方の異形態の使用が可能であるとしている (例: *rajon-ra / rajon-ta* 「郡で」、*vokzal-ra / vokzal-ta* 「駅で」)。

³ ロシア語の音韻体系に従って発音される比較的新しいロシア語からの借用語のラテン文字転写は Timberlake (2004: 25) にある linguistic 方式に従う。異なる転写法であることを示すため、それらの借用語は斜字体で示す。

1.3. 問題提起

上述のように、欧米の先行研究では /r, l, n/ で終わる語には /t/ で始まる異形態が現れると記述されている。一方、チュヴァシ語の伝統文法のうち Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012) は、/l, n/ で終わる語の場合はいずれの異形態も現れうると述べ、Pavlov (2014a, b) は、/l, n/ で終わる語のうち固有語には /t/ 始まりの、借用語にはいずれの異形態も（多くの場合 /r/ 始まりの異形態が）現れると述べている。

発表者の観察では、Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012) が述べるように、/l, n/ で終わる語の場合には /r/ 始まりの異形態もみられるが、/r/ 始まりの異形態は特に /n/ 終わりの語でよく見られるように感じられる。さらに、Pavlov (2014a, b) の記述に反し、固有語でも専ら /r/ 始まりの異形態が現れるものも見られる。よって、定量的調査を行い、異形態の正確な分布を明らかにする必要がある。

2. 調査

本節では、2.1 節で調査方法について述べ、2.2 節で調査結果を示す。

2.1. 調査方法

表記が発音を反映していると仮定し、コーパス調査を用いた定量的調査を行う。オンラインコーパス Čavaš čelxin ikčelxellë süpsí⁴ を用いて、以下の手順で調査を行う。

- ① スロットに /r, l, n/ で終わる語に位格・奪格の /r/ または /t/ で始まる異形態を後続させた形式（例：чунра, чунта, чунран, чунтан）を入力して検索する。
- ② それぞれの異形態のヒット数を調べる（必要な場合はノイズを除去する）。

なお、調査結果には入力した様々な語のうちヒット数の多いものを挙げる。

2.2. 調査結果

調査の限りでは、/r/ 終わりの語に /r/ 始まりの異形態が現れている例は見られなかった。これは類似の交替を示す接辞（4 節で後述）でも同様であるため、チュヴァシ語では形態素境界をまたぐ /r/ の連続が許されないと考えられる。一方、/l, n/ 終わりの語には /r/ 始まりの異形態が現れている例も見られた。本節では以下、2.2.1 節で /l/ 終わりの語、2.2.2 節で /n/ 終わりの語についての調査結果を述べる（本節で挙げる表 1~3 では、より多く現れた異形態のヒット数を太字で示し、見やすくするために行ごとに網掛けを施した）。

2.2.1. /l/ 終わりの語

/l/ 終わりの語の場合、入力したすべての語において /t/ 始まりの異形態の方が優勢であることが分かった。調査結果は、以下の表 1 に示す通りである。

⁴ 総語数約 549 万語（2020 年 7 月 10 日現在）。タグなしコーパス。多くの例文にはロシア語の対訳が付いている。スロットは一つのみであり、検索で記号を用いることはできない。2020 年 7 月現在、リアルタイムで更新作業（新テキストの追加、ロシア語訳付け作業）が行われている。新聞・雑誌の記事、ニュース、散文集、宗教関連のテキストなどを含む。

表 1：調査結果（/l/ 終わりの語）

		/r/	/t/	合計
šül 上	šül-Re	0	494	494
	šül-Ren	0	394	394
kil 家	kil-Re	0	1223	1223
	kil-Ren	8	310	318
šul 道／年	šul-Ra	4	1885	1889
	šul-Ran	65	533	598
vokzal 駅	vokzal-Ra	15	24	39
	vokzal-Ran	2	26	28
čul 石	čul-Ra	2	0	2
	čul-Ran	35	68	103

表 1 に示した結果から、/l/ 終わりの語における異形態の現れ方には主に、① /t/ 始まりの異形態のみが現れる、② /t/ 始まりの異形態の方が多く現れる、③ 位格は /t/ 始まりの、奪格は /r/ 始まりの異形態の方が多く現れる、の 3 つのパターンが見られることが分かる。

2.2.2. /n/ 終わりの語

/n/ 終わりの語の場合、全体的に /l/ 終わりの語に比べて /t/ 始まりの異形態の出現頻度が高いことが分かった。なお、/n/ 終わりの語に関しては、代名詞と代名詞以外に分けて調査を行った。まず、代名詞以外について行った調査の結果について述べる。調査結果は、以下の表 2 に示す通りである。

表 2：調査結果（/n/ 終わりの語、代名詞以外）

		/r/	/t/	合計
vīrān 場所	vīrān-Ra	0	1380	1380
	vīrān-Ran	0	854	854
rajon 郡	rajon-Ra	22	426	448
	rajon-Ran	5	57	62
šīn 人	šīn-Ra	1	29	30
	šīn-Ran	287	90	377
čun 心	čun-Ra	46	2	48
	čun-Ran	35	491	526
sān 顔	sān-Ra	3	1	4
	sān-Ran	210	33	243
Čävaš Yen ⁵	yen-Re	266	0	266
	yen-Ren	20	0	20

⁵ チュヴァシ共和国

表2に示した結果から、/n/ 終わりの語における異形態の現れ方には主に、① /t/ 始まりの異形態のみが現れる、② /t/ 始まりの異形態の方が多く現れる、③ 位格は /t/ 始まりの、奪格は /r/ 始まりの異形態の方が多く現れる、④ 位格は /r/ 始まりの、奪格は /t/ 始まりの異形態の方が多く現れる、⑤ /r/ 始まりの異形態の方が多く現れる、⑥ /r/ 始まりの異形態のみが現れる、の6つのパターンが見られることが分かる。

次に、代名詞に関して行った調査の結果について述べる。調査結果は、以下の表3に示す通りである。

表3：調査結果 (/n/ 終わりの語、代名詞)

		/r/	/t/	合計
śak(ã)	śakān-Ra	0	918	918
これ	śakān-Ran	0	276	276
ku	kun-Ra	2	8845	8847
これ	kun-Ran	20	1293	1313
vāl	un-Ra	5600	146	5746
それ	un-Ran	5580	1553	7133
epě	man-Ra	122	0	122
私	man-Ran	1203	1	1204
měn	měn-Re	134	6	140
何	měn-Ren	256	43	299

měn「何」以外の4つはいずれも、/n/ 終わりの斜格語幹（属格形と同形）に位格・奪格が後続する。表3に示した結果から、śak「これ」には /t/ 始まりの異形態のみが現れ（パターン①）、ku「これ」には /t/ 始まりの異形態の方が多く現れ（パターン②）、他の3つの代名詞には /r/ 始まりの異形態の方が多く現れる（パターン⑤）ことが分かる。

3. 考察

調査の結果、/t/ 始まりの異形態の全体的な出現頻度は、語末音によって高い順に左から「/r/ > /l/ > /n/ > 他」であること、異形態の出現頻度がどのパターンを示すかは、語によって異なっている（音韻的・意味的な規則性が見られない）ことが分かった。語末音による各異形態の大まかな分布⁶を以下の図1に示す。

⁶ 図1で、Vは母音、Oは障害音を表わす。/t/ 始まりの異形態の分布域は網掛けで示し、その横幅は、調査結果をもとに予想した大まかな頻度を表わす。

語末音	/r/ と共有する素性	/t/ 始まりの異形態の頻度
V	[+son]	
O	[-syl]	
/m, y/	[-syl, +son]	
/n/	[-syl, +son, +cor]	
/l/	[-syl, +son, +cor, -nas]	
/r/	全て	

図 1：語末音による位格・奪格の異形態の分布

/t/ 始まりの異形態の出現頻度は、語末音の /r/ との類似性の高さと相関していると言える。[-syl, +son] の素性を共有する共鳴子音 /r, l, n, m, y/ のうち、[-syl, +son] に加えて [+cor] の素性を共有する歯茎音 /r, l, n/ の後で /t/ 始まりの異形態が現れるが、/l, n/ の後では /t/ 始まりの異形態も現れうる。/t/ 始まりの異形態の出現頻度は鼻音 /n/ の後に比べて、[-syl, +son, +cor] に加えて [-nas] の素性を共有する流音 /l/ の後で高い。よって、語末音の /r/ との類似性が高いほど /t/ 始まりの異形態の出現頻度が高いと言える。

共時的には、分布の広さから位格・奪格の基本形は /r/ 始まりであり、/t/ 始まりの異形態は、歯茎共鳴音 /r, l, n/ の後で (/l, n/、特に /n/ の後では部分的に) /r/ が /t/ に異化を起こしたものとみることができる。一方、他の多くのチュルク諸語で位格・奪格の形式は /d/, /t/ 始まりであることに加え、揺れは見られない。例えば、トルコ語（オグズ語群）では母音・有声子音の後で /d/ 始まりの、無声子音の後で /t/ 始まりの異形態が現れ、揺れは見られない（例：Ankara-**da** / Ankara-**dan** 「アンカラで／アンカラから」、ev-**de** / ev-**den** 「家で／家から」、otobüs-**te** / otobüs-**ten** 「バスで／バスから」）。バシキール語（キプチャク語群）では比較的複雑な交替が見られる（位格では /d/, /t/ に加え /l/, /ð/ が、奪格では /d/, /t/ に加え /n/, /ð/ が交替する）が、母音の後で位格は /l/ 始まり、奪格は /n/ 始まりの、/w, y, r, ð/ の後で /ð/ 始まりの、他の有声子音の後で /d/ 始まりの、無声子音の後で /t/ 始まりの異形態が現れ、トルコ語と同様に揺れは見られない（例：qala-**la** / qala-**nan** 「街で／街から」、öy-**ðä** / öy-**ðän** 「家で／家から」、urman-**da** / urman-**dan** 「森で／森から」、avtobus-**ta** / avtobus-**tan** 「バスで／バスから」）。チュヴァシ語の位格・奪格における頭子音交替は、/r/ が現れる点、(/l, n/ の後で) 揺れが見られる点で特異である。通時的には、チュヴァシ語の位格・奪格の頭子音で /d/ > /r/ の変化（ロータシズム）⁷が起こった可能性がある。その場合、まず母音間で起こり、その後類推⁸で広がったが、歯茎共鳴音 /r, l, n/ の後で (/l, n/、特に /n/ の後では部分的に) 接辞頭の /t/ が生き残ったと考えることができる。

⁷ チュヴァシ語ではロータシズムが起こったことが分かっている。庄垣内 (1989: 873) によると、11 世紀後半から 13~14 世紀の間にチュヴァシ語で d > ð > z > r の過程を経たロータシズムが起こった（例：チュヴァシ語 xur- に対し古チュルク語 qod- 「置く」、チュヴァシ語 erne < ペルシャ語 ađina 「金曜日」）。

⁸ šer 「地面、場所」の位格形／奪格形には /t/ 始まりの異形態が付いた形 šer-te / šer-ten の他に šertre / šertren のような形も見られる。これは接辞部分に /t/ を保って /r/ の連続を避けつつも、類推により /r/ が現れたものかもしれない。/rt/ で終わる語の位格・奪格形（例：šurt-ra / šurt-ran 「家で／家から」）からの類推も考えられる。

4. 今後の課題

調査対象とした語の選定はやや恣意的であったため、今後はより多くの語を調査すること、方言差や個人差があるか、規範意識が関わっているかについても調べる必要がある。

なお、位格・奪格と類似の交替を起こす接辞に直説法過去接辞 {-R} があるが、位格・奪格とは異なり、/l, n/ の後でも専ら /t/ (三人称では /č/) が現れる (図 2、左)。比較級の接辞は /t/ 始まりの短形 -rAx と /t/ 始まりの長形 -tArAx を持ち、/r/ 始まりの異形態が /l, n/ の後にも現れうる点で位格・奪格に類似している一方、/t/ 始まりの異形態が /r, l, n/ 以外の音の後にも現れうる点で異なる。発表者の別稿における調査によると、/t/ 始まりの異形態の出現頻度は語末音ごとに高い順に左から「/r/ > /l/ > /n/ > /m, y/ (非歯茎の共鳴子音) > V, O (母音・阻害音)」であり、位格・奪格と同様に語末音の /r/ との類似性の高さと相関を示していると言える (図 2、右)。今後は、これらの接辞も含めてチュヴァシ語における /r/ と /t/ の交替を全体的に考察する必要がある。

語末音	/t/ 始まりの異形態の頻度	語末音	/t/ 始まりの異形態の頻度
V		V	
O		O	
/m, y/		/m, y/	
/n/	■	/n/	■
/l/	■	/l/	■
/r/	■	/r/	■

図 2：語末音による過去接辞 (左) と比較級接辞 (右) の異形態の分布

参考文献

- Clark, L. (1998) Chuvash. Johanson, L. and É.Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*. London, New York: Routledge. 434-452.
- Krueger, J. (1961) *Chuvash Manual. Introduction, Grammar, Reader, and Vocabulary*. Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series 7, The Hague: Mouton.
- Pavlov, I.P. (2014a) *Sovremennyy Čuvaškij jazyk: monografija: v 2 tomax. Tom 1: Morfemika, morfonologija, slovoobrazovanie*. Čeboksary: Čuvaškij gosudarstvennyj institut gumanitarnyx nauk.
- Pavlov, I.P. (2014b) *Sovremennyy Čuvaškij jazyk: monografija: v 2 tomax. Tom 2: Morfologija*. Čeboksary: Čuvaškij gosudarstvennyj institut gumanitarnyx nauk.
- Sergeev, L.P., E.A. Andreeva and V.I. Kotleev (2012) *Čavaš čělxi: čavaš filologi fakul'tečšn studenčesem valli xatěrleně věrenü këneki*. Šupaškar: Čavaš këneke izd-vi.
- 庄垣内正弘 (1989) 「チュヴァシ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』第 2 巻. 東京: 三省堂. 869-975.
- Timberlake, A. (2004) *A reference grammar of Russian*. Cambridge University Press.

調査資料

Čavaš čělxin ikčělxlle šüpši (<http://corpus.chv.su/>) [最終閲覧日: 2020/7/13]